

## 【歌(句)物語を作ろう】

「奥の細道」(紀行文)と「伊勢物語」(歌物語)を読んだ。どちらも歌(句)が中心で、その歌(句)によって転換にピーカーク(カタルシス)を持ってきて、その場面の心情が集約されたり、その歌(句)によって転換があつたりというものである。この単元ではオリジナルの歌物語を作ることをする。歌や句は教科書に載っているものを1つ選び、その前後のストーリーは全くの創作で自分で勝手に作つてみようという課題だ。いかに創作ストーリーとその歌や句との絶妙なギャップを演出できるかを目指して創作しましょう。

### 【フォーマット】

歌(句)は教科書から見つけ出す。(現代・古典問わない)  
ストーリーは四〇〇字~八〇〇字程度 黒ペンで清書する  
イラストを付けて也可

### 【期限】

授業時間3~4時間で費やす。  
【発表】対面もしくは紙面での発表を計画している。

以下に過去に生徒が創作した作品を紹介します。

とある仲のいい男女がいた。二人は小さい頃からずつと一緒に先日つきあうことになった。二人は一日一日がとても楽しく過ごしていた。ある日、その女性の方が暗い室で泣いていた。とてもない虚無感と绝望が胸の内にあった。彼は私前から姿を消した。別れさえもなく突然になってしまった。携帯もつながらない。私はひとりぼっちになってしまった。あんなに愛し合っていたのに、姿を消したこと自体許せないけど、何も言つてくれなかつたことも許せない。愛していくからこそ憎い。憎まなければいけなくなつた自分的心がつい。どうしてこんな不幸になつてしまつたのだろうか。彼に出会わなければこんなことはならなかつたのか……。といつて詠んだ歌。

あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながなし夜をひとりかも寝む

四月某日。今日は職場の同僚と飲み会。お酒に強くない私は、一杯を飲み干した時点でも薄手に真つ赤になっていた。お酒も入り、うとうとしてきた私は、寄りかかるものがほしく「ああ……枕がほしいなあ……」と呟いたらしい。すると隣にいた男がそっと枕を差し出した。このときおそらくお性なうに酔つていた私は、その腕枕で爆睡したのだろうか。誤解を解くため、この話をしたのも何回目だろうか……。と言つて詠んだ歌。(悪い噂が立てしまうのは残念だ。)

逢ふことの絶えてしなくはなかなかに人をも身をも恨みざらまし

春の夜のゆめばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそ惜しけれ

ヨーロッパでの秋で、留学していた日本人が足を引きずりながらある背の低いおじいさんに公園で出会った。お互に一人であつたためか、目が合い、ベンチに座つた。留学している日本人はまだあまりその地の言語を使いこなせずにいた。そのとき、おじいさんはペラペラと話し始め、日本人はその話について行くだけで精一杯だった。しかしそのおじいさんの表情を見ると、何かを背負つたような顔をしていた。日本人は長い人生の中で、きっと大変なことがあつたんだろうと思い、とにかくなり、少しのお金渡した。すると、急におじいさんは立ち上がり足のけががなかつたかのように長い長い夜を告げる闇の中へ走り去つていつた。「今夜語り明かす予定だつたのに、今夜も一人かのね。」果たしておじいさんは何を言つたのか。

たちわかれいなばの山の峰に生ふるまつとしきかばいま帰りこむ